

ディアリンの土器生産業について

西村昌也

On the Pottery Production in Địa Linh

NISHIMURA Masanari

キーワード：ディアリン、土器造り、ロクロ不使用、型起こし、磚（レンガ）生産

1. はじめに

様々な手工業生産を行っているディアリン村において、土器生産業について簡単な調査を行ったので報告する。土器生産は、各家庭の庭先などを利用して行われており、家族規模の小規模な手工業生産の典型例である。土器生産家庭はディアリン北端の東西を横切る道路南側にあるレンガ窯の周辺域（口絵8参照）に集中している。

2. 聞き取り調査例

2.1 第1調査例：Võ Văn Hải（兄、51才）/ Nam（弟、45才）兄弟

レンガ工場の東脇に住み、土器造りを行っている。土器造りは仏属時代からやっているそうだが、家譜資料などはないという。家の言い伝えでは、曾祖父の時に Binh Định（ビンディン）省より移住し住み着いたという。内祖父も土器生産を行っていたとのことである。

製品は、灶君を象った土製人形（図1：11月に生産）や、葬式時に五穀（米、大豆、餅米、ごまなど）を入れて備える小壺（図2）が主たる製品で、昔から作っていた器種のようなものである。

土器製作の原料である、粘土は Hoài Giang（Đồi 12 B）の水田の主より購入しており、船で行って土を購入し持ち帰っている。土は半日水に浸し、その後ふるいにかける。手足で捏ねるが、混和剤としての砂は混ぜない。模型に土を押し込んで（図3）、外して乾燥（3日間程度）させ焼成している。利用している箱型窯（lò hộp：図4）は、140cm幅×140cm奥×100cm高程度の小型のもので、昔から利用している窯形式である。窯体の下部が最初に火をくべる燃焼室になっており、四方に通風口が設けられている。そしてロストル窯のように格子枠を挟んで上方空間が焼成室になっている。窯体の骨格はレンガ積みで、土に砂（建設作業に使う砂）を混ぜて窯の周りを覆っている。燃料はもみがら（vò trấu）で、



図1 第1調査例—電神土製品

薪は使っていない。男女の分業は、男が窯仕事、女が型入れをするのが普通である。

窯1基で、一度に2000個の灶君人形土製品が焼成できるし、土製支脚（*ōng táo*：炉の五徳として利用：図5）であれば一度に300個焼成できる。乾燥した製品を窯の焼成室に配した後、焼成室内のすき間を埋めるように籾殻を入れ、火を燃焼室でつけて徐々に籾殻（図6）が燃焼し、製品が徐々に焼き固まっていくようになっている。

1ヶ月に2度ほど焼成を行うが、祖先にお供えをして、拝礼してから行うのが習わしである。焼成は



図2 第1調査例—五穀入れ



図3 第1調査例—型起こしして乾燥中の電神像



図4 第1調査例一窯



図5 第1調査例一土製支脚と香炉

3日3晩かけて行い、2日2晩かけて冷却する。できあがった製品はフエ市内に売りに行くが、注文生産も行っている。だいたい一度に100～1000個単位で売っており、^{ドンバ}Đông Ba市場などから販売者が購入に来ることもある。

この家族は水田稲作を昔から行っておらず、特に土器造りで生計を立ててきたようだ。ただし、一族の中では、彼らのみ土器製作をやっているようだ。

2.2 第2調査例：Ngô Đức Hùng (45才)、Hoàng Thị Thư 夫妻

Xóm Ngõa Thượng (ゴアトゥオン集落)に住む家族で、一族はNam Thanh (ナムタイン：フオンヴィン社北端のレンガ窯集中域)に住んでおり、一族の祠堂もそちらにあり、現在でも瓦やレンガを生産しているようだ。Nam Thanhには、もともとホイアン、クアンナム省、ビンディン省¹⁾などから来た人が多く住んでいるという。

父の代にゴアトゥオン集落にやって来て定住したようで、以前は村で5軒ほど土器製作をしていたし、

1) これらの地域は、土器などの生産地としても有名で、以前はフエにも大量に搬入されていた。

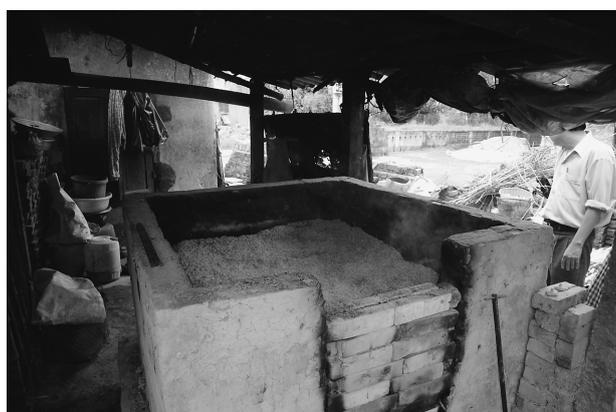


図6 第1調査例—窯と粘土



図7 第2調査例—土製支脚

レンガを生産している窯も複数軒²⁾あったようだ。主要な製品は、ông Táo (灶君と呼ばれる土製支脚：図7)、ông vôi có quai (石灰壺)、bình để tiền (貯金箱)、cốc ngũ cốc (五穀壺：図8) などである。昔は Đồi 12 B³⁾ 近くで土を採取していたが、現在土の採取が禁止されており、水田の下の土である象牙色の粘土 (đất sét màu ngà)、黄色粘土 (đất sét màu vàng) を買っている。

土は購入後、夾雑物を取り除きながらうす切りを繰り返し、水に浸し、踏みつけ、すりつぶし、そしてこねる。

焼成前の製品乾燥は雨天の場合10日位で、晴天の場合2～3日位である。前事例と同じように、箱形窯で焼成を行い、冷却後、型起こしで生じた製品のばりを取り除く。燃料は、昔は石炭を使っていたが、現在は周囲環境の問題などもあり、籾殻を使っている。

一度の焼成で、灶君人形だと2000～3000個焼成できるという。夏は五穀壺(米、豆、とうもろこし、ごまなどで3つ必要)などを生産している(図9)。

2) ディアリンの北端の道から当家に行く道では、過去レンガなどを焼成していたと思われる窯の痕跡を確認することができる。

3) 河泡と呼ばれたディアリンの飛び地(本紀要西村歴史地理論文図24参照)やそれ以西の地区。



図8 第2調査例－五穀入れ



図9 第2調査例－窯内で焼成された五穀入れ

この他、この地域では棺桶に遺体を入棺する時に、死者の枕として未焼成の粘土塊⁴⁾を頭の下と頭の両側、さらにあごのところに置くが、それらを生産している（図10）。これらはáp nhān、áp nhīと呼ばれており、ディアリン集落の川辺りの霊和祠周辺（木工師が集住する）にある棺桶生産や販売を行っている家々などに運ばれ売られている。

灶君人形は、竈を祀る祭日に備えて正月前に大量に買い付ける人があり、遠方に売っている人がいるようだ。現在はホーチミン市周辺までに販路は伸びているらしい。

当人も水田耕作を行っておらず、土器生産が主たる生計手段のようだ。また、土器生産における男女分業もないという。

生産道具に関するメモ：粘土板をうすく切り出すための糸のこをnèという。穴の開いた土製円板：練炭炉の燃料の上に置くもので、giáという（図11）。

4) これは棺桶の中の死者が安眠できるよう使われるものである。埋葬時に棺桶の中の死者が揺れ動いたりするのはタブーである。



図10 第2調査例—棺桶用土枕など

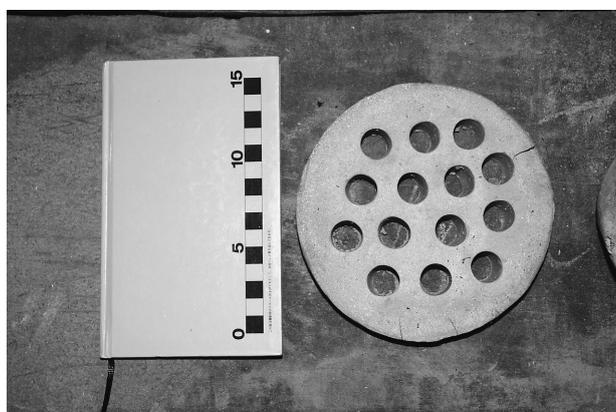


図11 第2調査例—有孔土製板

2.3 第3調査例：Trương Văn Mười 氏（2010年時67才）

1982年以降、Hoàng Văn Trung 氏（当時52歳）について土器作りを習い、土器作りを始めた。父は裁縫師で、自身は1982年まで土器を作ったことはなく、バイクや三輪車でのタクシー業をしていた。Hoàng Văn Trung 氏は、先祖がタインホア出身で、フェ域に住み着き17-18代目となる人で、もともとはTriệu Sơn Đông（フオンヴィン社北域）に居住していたが、祖父・祖母の代にディアリンに移り住み、自身もディアリン出身の人を妻にし、土器造りを始めたという。ただし、一族がもともと土器造りをしていたわけではない。

土器造りの製品は最初、火炉（hoà lò）と呼ぶ七輪形土器を製造していた。そして、ある時期から灶君を象った土製品（乾燥品）を、最初は手づくねで今のものより大きいサイズで製作していたが、後に型作りに移行し、小型品として焼成するようになった。ただし、最初の頃は売り物で作っていたわけではなかったが、Quảng Nam（クアンナム）省などから移入され販売される土器製品には灶君人形などがなく、商品として盛んに作るようになったようだ。そして、風水を得意とする Hồ Văn Yêm 氏（本紀要で資料紹介を行っている『竈神真経』のもともとの所有者である）が創造した3人の竈神を象った土製品を、1995年から2004年まで製造していたが、2005年以降はより簡略化したもの（図12、図13）を作って売っている。



図12 第3調査例：竈神土製像



図13 第3調査例の竈神像のための木型



図14 第3調査例での五穀入れ生産風景



図15 第3調査例—五穀入れ製作のための木型



図16 バオヴィン水死者を祀る場近くの木に竈神像が祀られていた

現在、生産しているものは石灰壺（Bình voi）、香炉（Lư trầm）、五穀壺（Bình ngũ cốc：図14、図15）、竈神像などである。以前は12月になると、家の周囲の婦人が、天秤棒で街の市場の方へ売りに行っていたという。この土製竈神像は、フエのあちこちで現在も線香などと一緒に祀られているのを見かけるこ



図17 竈神の土製品使用状況（Phu Luong のチャンパ石碑にて）

とができる（図16、図17）。

レンガ生産と同じ土を使っているが、現在はフェ市街でビル建設の基礎工事で掘り下げた時にでてくる粘土を売る業者から土を購入している。そして、家の横に小型の箱形の窯を作り、焼成の度に解体・建炉している。

土器の製作は、男が主体でやっており、女は基本的に関わっておらず別の商売をしているが、大量に生産する日は女も手伝うようだ。

ディアリンに現在ある大型レンガ窯は、Mai Kiém というディアリンの人から、1987-1988年頃に Hoàng Văn Việt 氏が買い取ったもので、以前は Hà Bàu（ディアリンの飛び地：概要 西村歴史地理論文参照）などに船で行って土を買っていたという。焼成は、以前は藁を使って3日間行い、1日かけて冷却していた。薪を使って焼成すると火力が強すぎて、土器中の鉄分を含む粒子が破裂するそうで、ゆっくり加熱する必要があるからだという。この焼成法で1000個くらいまで生産可能であった。現在は石炭と薪で焼成を行っている。

3. まとめ

以上、聞き取りで明らかになったことと、これまでの歴史地理学的調査の結果をまとめると、ディアリンの土器やレンガ生産窯を以下のように位置づけられるのではないかと思う。

ディアリンの住民の認識では、泥尾匠局の廟（本紀要 西村歴史地理論文参照）や、その香火田が位置するゴアトゥオン集落は、近い過去において居住者の疎らな地域であったようだ。その南方のバオヴィン側では都城建設時のレンガ窯を設けているので、おそらく当地域もレンガや土器生産に適した、標高の低い土地であったと考えられる。また商区バオヴィンに近接することが、商品需要の高い製品生産に結びつくという利点もあったと考える。

そのような状況がナムタインなどのフォンヴィン社北方からの移住者による土器やレンガ生産に繋がったと思われる。寓居民としてディアリンに居住し、水田耕作などに関わらずに生計を立ててきたので

あろう。

また、ディアリンでの土器生産は、型起こしによる成形が中心で、ロクロ利用による釜や鉢などの高度な土器生産技術は存在せず、過去に存在した痕跡もない。さらに、レンガ生産と土器生産の窯の基本構造は同じで、用いる土も同じである。このようなことは、ディアリンの土器生産がレンガ生産の技術を基盤にして派生していることを示している。箱型レンガ窯は、もともとは北部ベトナムに技術・形態的起源をたどることができ、高火度焼成技術により無釉陶器などを生産していた^{フオックティック}Phước Tíchやホイアン郊外の^{タインハー}Thanh Hà集落などとは全く系譜が異なる土器生産技術である。ディアリンの土器生産業はレンガ生産が活発になった故に起きた産業として位置づけることができる。おそらくナムタインに入植したレンガ生産者も、故郷ではもともとレンガ生産を行っていた人たちが中心であったと思われる。

